

3. フランスの山地農業（1月25日）

（国立国会図書館） 北 林 寿 信

1. 山地農業の現状・問題点

山地区域とは農業条件を考慮した行政上の区域を指し、ヴォージュ、ジュラ、アルプス、中央山塊、ピレネー、コルシカがそれに該当する。面積では国土の21%、人口では全人口の6.7%を占める。

山地区域は様々な山地からなり、気候条件によって湿潤山地と乾燥山地に、また地形・標高によって高山地（標高1,200 m以上）、山地（600 m以上）、山塊区域に分けられる。社会経済的条件からみると、ヴォージュ、ジュラ、北アルプスは伝統的工業や高級チーズ生産に恵まれているが、その他の南部山地は大市場から遠く、農業以外には特筆すべき産業がない。

次に山地農業についてみると、1977年現在でフランスの農地面積の13.5%、農業経営数の12.6%、農業就業人口の12%、そして農業生産額の6.7%を占めている。農業生産額のうちの83%は畜産であって、特に羊乳チーズはフランス全体の82%、羊肉は30%を生産している。チーズは高級チーズが多く、フランスの原産地呼称チーズ25種のうち15種が山地で生産されている。

山地農業の歴史をふり返ると、20世紀前半には植物生産の技術進歩、すなわち機械化、施肥改善、品種改良により、植物生産は平野部に集中した。これに対して畜産では特段の技術進歩がみられず、山地畜産は競争力を失っていなかった。こうして山地は畜産に特化したのである。加工品にしても、平地の酪農工場はバターやソフトチーズを製造するだけで、山地はチーズ製造の伝統によって有利な価格を維持することができた。しかし、1950年以後の畜産技術の進歩—専門経営の発展にはめざましいものがあり、これらの変化が山地経営には接近し難いものであったため、山

地畜産は次第に苦境に陥るようになった。そのうえ山地チーズの生産の地理的拡大、産地内での工場生産の発展により、「品質」、「呼称」による加工品の優位も崩れていった。

1970年以降の山地農業の動きをみると次のような点を指摘しうる。すなわち、農業生産の増加テンポがフランス平均に等しいこと、地域別にみると湿潤山地の生産が増加したのに対し、乾燥山地の生産が減少したこと、品目別では牛乳生産が増加したのに対し、牛肉・羊・山羊は停滞、植物生産は後退していること、である。総じて、湿潤山地では牛乳が、また乾燥山地では羊（あるいは山羊）が生き残りのための最後の手段とされている。

2. 山地農業政策

山地農業政策の歴史は1967年の農村刷新政策に遡る。これは過疎・過密問題への対応、均衡の取れた国土整備を目標としたものであったが、その施設インフラ整備予算をみると山地関係のものは少なく、しかも農業よりも観光開発に偏っていた。その後、観光開発によるツーリズムの発展が山地の自然・生活環境の維持の必要性を意識させ、この維持を最低の費用で行なえるとして1972年以降、山地農民に対する援助が実施されてきた。

山地に特有な施策としては直接所得援助、機械化援助、乳質への援助、牛乳共同責任税の免除があり、山地に有利な援助としては青年農業者自立援助、畜舎建設援助、近代化貸付がある。しかし、こうした山地農業への国家財政支出は山地内の格差を拡大する問題を抱えており、左翼政権は従来の山地農業政策の改革に取り組んだ。（文責・柘植徳雄）